

揖斐川町学校教育の在り方審議会・清水地区集会（議事録概要）

1 日 時 令和7年11月21日（金） ＜開会＞19時00分 ＜閉会＞20時00分

2 場 所 清水公民館・集会室

3 出席者

審議会委員 佐木 みどり、中島 勝義

事務局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課係長 松浦 亮太

地域住民 17人

4 次 第

（１）開会挨拶

- ・ 佐木副委員長より、開会の挨拶を行う。

（２）概況説明

- ・ 教育長より、「揖斐川町における学校教育の現状と課題」について説明を行う。

（３）意見聴取

住 民：大野町では小学校と中学校ともに1つに統合するという話が出ており、揖斐川町も人数の関係でそういう方向性になると思うが、その場合はスクールバスを運行することになる。だが、今はスクールバスを運転することができるドライバーがいない。そうするとスクールバスを運行することができないため、統合することもできないのではないかな。今は保護者も共働きの方が多く、送迎はできない。保護者に今以上の負担をかけるような施策になってはいけない。

住 民：小学校や中学校の統合は、およそ何年後を想定しているのか。

教育長：これまでの集会でも、早く統合に向けた準備をした方がよいというご意見もあれば、もう少し子どもたちの動向を見ながら期間をおいて考えた方がよいというご意見もあった。質問を返すことになるが、統合する時期としてどのようなお考えをお持ちか。

住 民：個人的には早い方がよいと考える。私の子どもは小学校に通っているが、先生が何らかの理由でお休みされると代わりの先生がなかなかいらっしゃらないということも聞いているし、1クラスに数人しかいない環境が続くことはどうなのだろうかという思いもある。統合するのであればスクールバスを使うことになるので、登下校時は今通っている小学校にまず集合する形で、しっかりと運行してもらえるのであればよいと考える。

教育長：この場で結論を出すことは難しいので、早く進めるべきなのか、「早く」とは何年先のことを指すのか、今後審議会にて審議していただくことになる。12月13日にはシンポジウムを開催するが、その中では大きな統合をされた自治体の話も伺うため、ぜひお越しいただいて、どのくらいの期間で検討されたのか、あるいはどういった方法で子どもたちが登下校しているか、といった話も聞いていただけるとよいのではないかと考えている。

住 民：現状の話になるが、今は運動会などがあまりにも小規模になっており、子どもたちがかわいそうである。また、修学旅行なども学校単位では規模が小さくなっており、町費で負担していることを考えると費用面では学校ごとの差がないはずなので、そうし

た行事のうち可能なものについては共同実施をすることができないか検討されてもよいのではないか。

住 民：統合する場合の校舎について、新たに建てるのか、それとも既存のものに集約するのか、どのような方針となっているか。

教育長：今の時点では結論を出すことは難しいが、どのようなご意見をお持ちか。

住 民：理想はできる限り市の中心で、運動場の広さも確保できるように新しい校舎を建てることであり、場合によっては小学校と中学校を同じ場所につくるというようなことなども考えられると思うが、費用の問題は避けられないため、すぐに決断することは難しいのではないかと感じている。ただし、資料の図表2に書かれている子どもの人数を考えると、そのようなことを言っている状態ではない。1学年に2人という状態になってしまえば、授業ではなく個人教育の延長のようになってしまい、集団生活をするという場面がまったくなくなってしまうため、この問題は早急に考えなければいけないものだと考える。先ほどのご意見のように、場合によっては例えば運動会を一緒に行く、あるいはICTを活用して学校間の交流を深めるような取組みをするなど、もっと友達を増やすことができるような方法を進められるとよいのではないか。

住 民：私は小学生と中学生の子どもがいる親である。上の子は小学生の時に特別支援学級に通っていて、下の子も現在特別支援学級に通っており、下の子は中学校に入学しても1年生のうちは特別支援学級に入ろうと考えている。そうした支援が必要な子どもたちは、揖斐川町でも実際に過去と比べると増えており、特別支援学級が必要な学校も、そういうものが必要だと思っている保護者の方も増えている。そうした親のうちの一人の本心としては、できる限りきめ細かく対応してほしい。支援が必要な、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子どもは一人ひとり特性が異なり、「こうすればよい」という型はないため、できるだけ小さな単位でみてほしい、というのが親としての望みである。今子どもが通っている小学校は、特別支援学級の数もそれほど多くはなく、学校全体でもそれほど大きな学校ではないので、通常の学級に行く時も担任の先生はもちろん、その他の先生たちにも子どものことをよく理解していただいている。恐らく町内の小学校はどれもそうだと思うが、そういった環境だからこそのびのびとよい方向に向かっていけているのではないかと、思っている。また、中学生の子どもについて、私の子どもの場合は町内の公立中学校ではなく私立中学校に通っている。なぜそうしたかと言うと、少し乱暴な言い方になるが、公立中学校は自動的に入ることができる学校であるため、落ち着きがない子からとても勉強ができる子まで大きな幅がある。そのため、私の子どもの場合は集中して勉強するのに少し難しい環境だという思いがあったため、少人数であることが特徴の町外の私立中学校に通うことにした。スクールバスで通っており、もっと遠方から通う子どもだとさらに早い時間に家を出ている場合もあるが、私の子どもの場合は家からバス停まで20分、バスで学校まで1時間ほどかかるため、学校に8時15分に着くためには余裕をもって家を6時半に出なければいけない。それでも、1学年50人の2クラス編制で、落ち着いた環境で学習できているため、小規模であることは決して悪いことばかりではないと思う。ただし、揖斐川町は昨年の出生数が50人程度であり、これは町全域で集まってちょうど子どもの通う私立中学校と同程度の規模になるという形なので、「規模」という言葉の捉え方の問題はあると思う。例えば、本当に数人しかいないような規模であればクラス替えができないという問題があり、クラス替えを経験することは刺激にもなり成長にもつ

ながる部分があるので、それはそれで必要なことだと感じている。小規模と大規模のどちらかが絶対よい、ということはいえず、大規模の方がよいことばかりではなく小規模の方がよいこともあるし、かといって小規模すぎても苦しいだろうと考えている。

住 民：どうしても児童生徒数ばかり注目されているが、そもそも揖斐川町自体の人口が減っているの、今後は当然税収も減ることになる。つまり、学校施設の維持費がどんどん賄えなくなっていくことも想定されるので、町に入ってくる税収の見込みと、そのうち実際に教育予算にかけられる金額の見込みを把握したうえで計画を立てなければならない。新たな校舎を建てたいと思っても建てる予算がない、新たに建てるのであれば既存の校舎を解体する必要があるがその予算も捻出できない、となっては本末転倒である。町の税収も念頭に置かなければ、このように一生懸命議論したところで結局「絵に描いた餅」になってしまう可能性がある。

住 民：これまで統合された小学校や中学校の校舎について、跡地の利用や建物のメンテナンスはしっかりされている状態なのか。

教育長：坂内小中学校の校舎については、特段利用はされていないが校舎は維持している。藤橋小学校・中学校と久瀬小学校・中学校については、西濃学園中学校・高等学校が利用している。春日小学校については公民館の分館として一部を地域の皆様に使っただいており、春日中学校については町の行政施設である文書館として利用している。

住 民：清水小学校もそうだが、児童数が少ないとどうしても雑草が生い茂ってしまうため、結局地域の人がそうした手入れをする必要があるし、これは統合して学校がなくなったとしても治安維持のためにも続けなければならない。誰かが管理しなければいけないが、どうしても町も管理できない部分がある。

住 民：この問題は重要な問題であり、例えば今でも長瀬小学校はそのままとなっている。我々も何らかの活用をしたいとは思って考えているが、よい使い道が見つからず放置されている状態である。清水小学校についても、もし統合した場合に放置して雑草を生い茂らせているようでは何にもならず、かといって地域に管理してくれと言われても難しいため、今後どうするのかよく検討する必要がある。跡地を何かに利用してもらえればよいものの、場合によっては解体して企業等に土地を譲渡することも考える必要があるが、もしそうなったとしても学校には避難所としての側面もあるため、本当にそうしてよいのかということも含めて議論しなければならないと考える。また、江崎岐阜県知事が、以前教育の方法を見直した方がよいのではないかとおっしゃっていた。先生が前で黒板に書く形式の授業をしているのは現在日本と韓国だけであり、欧米ではディスカッションや異学年同士で交流する試みなどがなされていて、今の日本の形式ではただ生徒が暗記するだけになり思考力が身につかない、というようなことも言われているようなので、今後様々な面から議論をして将来の教育の在り方を考えていく必要があるのではないかと思います。このような少人数になった時のクラス編制について、場合によっては他の学年が同じクラスにいるような編制をする、あるいは授業でそのようなグループをつくる、あるいは同じ学年だけでクラス編制をするなど様々な方法があるので、世界中でされている議論について我々も調べながら、将来の子どもたちにとってよい教育方法とはどういうことかについてももう少し議論していく必要がある。まずは、最近の子どもたちを見ていると暗記中心の勉強になっているところがあると思うので、考える力を身につけられるようなものを教育に取り入れていけるとよい。

副委員長：今の話に関連して、例えばフランスにはフレネ教育というものがあり、そこでは日本のような集団教育ではない教育を行っていて、私もその教育法が波及したスウェーデンの現場を視察したことがある。ただ、そういった形式も理想としてはよいとは思いますが、日本に取り入れるためにはまず教員養成の中で、そのような教育の方法論から展開していく必要がある。また、異学年が同じクラスにいる複式学級についても、教師の力量が問われるものである。今日この集会で、税金に関するご意見や施設管理に関するご意見など、本当に様々な貴重なご意見を出していただいているが、学校教育の在り方を考える時には「子どもにとってその仕組みがどうなのか」ということから考えることが最も重要ではないか。器に合わせて子どもの教育を考えていくのではなく、その年齢の子どもにとってどういう教育の在り方が必要なのか、というところから器を考えるべきではないかと私は思っている。江崎知事のご発言も把握しているが、実際に現場の教職員の方々のご意見を聴きながら進めなければ無理があるのではないか。今の日本の学校教育は集団教育で成り立ってきており、それがよいことか悪いことかはわからないが、欧米で行われている教育は文化の違う社会の中で生まれてきたものであるため、それを日本に、さらにこの地域に当てはめるといえるのはどうなのか、と感じている。

住 民：欧米の教育方法がよいということが言いたいわけではなく、子どもたちにとって一番よい方法を判断するのは難しいが、様々な視点で考えた時に、今は暗記だけに偏りすぎているように感じるので、もう少し考える力ということにシフトする方向になるとよいと思っている。

副委員長：それはとてもよい考えで、今文部科学省もそういった方針になっており、学校の方でも「架け橋プログラム」として検討して作成している最中だと思われる。

住 民：これは簡単な問題ではなく、様々試行錯誤しなければわからないものだと思う。難しい問題だが、将来の宝である子どもたちを本当に大事にしながら検討したい。

住 民：教育長の説明で、揖斐川町がセントジョージ市や芽室町との交流、ふるさと学習などといった様々な工夫をしていることはよくわかった。ふるさと学習に関連して、先日清水神社の役員の方と話した際に神社の紋の話になり、さらにそこから歴史を調べていくと、最終的に稲葉一鉄の戦国時代の鎧兜が残されているということがわかった。このこともふるさと学習の題材にしてもよいのではないかと感じると同時に、揖斐川町や清水地区にはまだまだ将来の子どもたちに伝えていくべき事柄があるのではないかと感じている。学校を統合するという話が出ている池田町や大野町は揖斐川町に比べて面積的には小さいため、その2町に比べると統合した学校の所在地やスクールバスなどの問題が出てくるが、裏返すとそれだけ各地域の暮らしの違いがあり、ふるさと学習の題材となるものが多いという強みがあるのではないかと感じている。そうした強みがある教育ができるような統合ができるとよい。また、町内には揖斐高校があるが、ここも特色のある高校にして存続させてほしい。揖斐高校がなくなると養老鉄道の廃線についても拍車がかかることになると思われるので、小学校・中学校・高校と含めてぜひ揖斐川町に存続させてほしいと考える。

住 民：愛知県在住で子どもがいる方に聞いた話では、学校で昔のように社会見学等の外の環境にふれる教育ができないことから、愛知県ではそれを家庭でできるように、出席扱いになる平日の休みを任意で3日間取ることができるとのことだった。岐阜県にはその制度がないために、今は土日しか子どもをどこかに連れていくことができず、歯が

ゆく思っている。土日に授業参観があつて振替休日になる日があれば親も有休を使って出かけようという気になるが、現状それができない環境であるため、教育委員会としてどのようにお考えかお伺いしたい。

教育長：学校の平日休業という制度に効果があるだろうとは感じているが、すべてのご家庭で子どもにそういった機会が保障できるかという点で心配があるということもあつて、踏み切れていないというところである。

住 民：どの家庭も、子どもたちに様々な経験をさせたいと努力されている。そういった制度を取り入れてもらえるとありがたい。

住 民：統合しない場合の教育法をＩＣＴの活用という観点から考えてみると、私自身もZoomを活用していくつか習い事をやっており、大人と子どもでの学習内容の違いもあるかもしれないが、十分勉強できている状況である。また、とある私立の学校に通っている方の話を聞くと、例えば雪が降って登校が難しい場合には、学校に行かずに中継で授業に参加できる体制をつくっている学校もあるとのことである。そうしたオンラインでの教育ばかりになってしまうと直接子どもたちが触れ合う時間を確保できなくなるが、そういうことも取り入れた教育をしていけば、ある程度離れたところにいる仲間とも連帯感をもつことができるのではないか。ＩＣＴを活用した学習を行うためには、先生のスキルや常日頃からいつでも対応できるような学校設備の充実、ＩＣＴでの学習に対応した資料の用意などが必要となり、難しい部分もあると思うが、普段オンラインで学習をしている立場としては資料が事前に配布されて共有しながら学べる環境は非常にありがたいと思っているので、今後活用していただきたい。

（４）閉会挨拶

- ・ 中島委員より、閉会の挨拶を行う。

以上、閉会